「花畑プロジェクト」を通した住民組織づくりの検討

Organizing local community framework through

"Ohanabatake(Flower Gardening) Project"

王麗華[1)]，伊藤直子[1)]，高安令子[1)]，磯山優[2)]，渋谷英之[3)]，
山口喜代美[3)]，戸口宏美[4)]，田中諭子[3)]，木下麻子[1)]，
落合佳子[5)]，桑野美夏子[5)]，高橋進[6)]，杉森裕樹[1)]

1）大東文化大学 スポーツ・健康科学部 看護学科
2）帝京大学　経済学部経営学科
3）埼玉県比企郡 鳩山町長寿福祉課 地域包括ケアセンター
4）埼玉県比企郡 鳩山町 町民健康課 保健センター
5）国際医療福祉大学保健医療学部　看護学科
6）大東文化大学　スポーツ・健康科学部 健康学科

抄　録

本論は，住民の「自助」と「互助」によって支えられている地域包括ケアシステムにおいて，「互助」機能を向上させるために，園芸活動・園芸作業による「健康長寿と癒しのお花畑の会」の活動を通じた住民による組織づくりについて検討した．筆者らは，鳩山町，同地域包括ケアセンター，同保健センターと協働で研究グループ「花畑プロジェクト」を立ち上げ，住民による声掛けなどを通じて地域住民の参加を着実に増やしている．この活動をより活発にし，長期間にわたって維持していくためには，様々な組織が連携・支援していくと同時に活動を組織化していく必要があり，大学はその中心的な役割を果たすことが期待される．

キーワード：花畑プロジェクト，住民組織，お花畑の会，連携，合議制

Ⅰ.はじめに

団塊の世代が75歳を超える2025年に向けて，要介護者の増加を見据えて，地域での生活を継続するための医療，介護サービス体制の整備が急務とされている．2019年度の日本公衆衛生学会学術総会において「いきいき百歳体操～住民主体の介護予防は，地域包括ケアを育む土壌～」「人生100年時代の地域包括エンパワーメント戦略 」「自治体・住民と取り組む地域参加型研究(CBPR)」など，さまざまなテーマでシンポジウムが開催されたように，地域・在宅・公衆衛生看護研究分野においても積極的にこの問題は取り上げられている．この課題解決の一つの解が「地域包括ケアシステムの構築」の推進であろう．「地域包括ケアシステム」は，住民の「自助」と「互助」によって支えられている．住民の「互助」機能を向上させるには，住民同士の日常のかかわりが大切である．高齢者の男女とも継続的に参加しやすい活動で，かつ住民間の交流意欲を高めて，地域の「互助」機能を推進する方法を模索する必要がある．

一方，「園芸活動・園芸作業」は，1人でも楽しめるが，共同で行う「園芸活動・園芸作業」は他人とのコミュニケーションを円滑化することでより楽しむことができ，「互助」の促進のきっかけづくりになると考えられる．また，「園芸活動・園芸作業」は適度な運動・身体活動を伴うため，高齢者の身体機能強化による健康維持・認知症予防に効果的であるとされる．

そこで我々研究グループは，「健康長寿と癒しのお花畑の会」(図1)の活動を通じた住民による組織づくりについて，本論で検討したい．

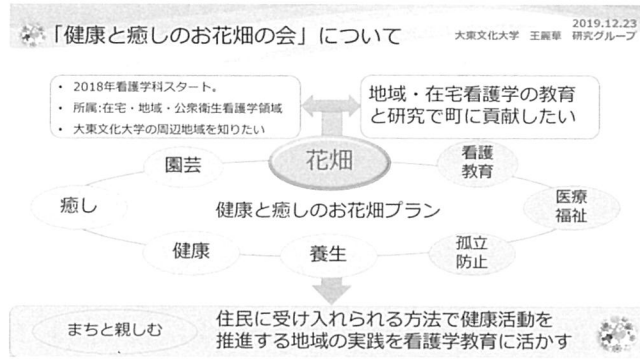

図1　「花畑プロジェクト」の全体イメージ図

Ⅱ.「健康長寿と癒しのお花畑プロジェクト」に関心を寄せた経緯

本学看護学科の地域看護に関連する教育と研究は人々の住まいである地域を基盤に「在宅看護学」,「地域看護学」,「地域包括ケア」など，多様な形で施設外でのケアと支援を看護教育に取り入れている．看護学生の地域看護学，地域包括ケア概論のグループ学修のなかで，大学近隣地域の鳩山ニュータウンで高齢化が進んでいる課題が浮かび上がってきた．そこから，学生と著者ら研究グループは地域の事情をもっと知りたいという考えにたどり着いた．

そこで地域を知るために著者らは鳩山町に出かけ，地区踏査や地区視診による地域診断を実施した．地域住民や交番の警察官と情報交換を行った．また，保健センターや地域包括ケアセンターとも交流する機会を得た．さらに，鳩山町の招待で学生と共に地域の「健寿まつり」に参加し．地域住民との交流の中で,「運動はやや苦手だが，人と交流したい」という高齢者の望みが明らかになった．農業出身者や庭いじりが好きな住民が多いことも明らかになった．大学の使命である教育・研究・地域貢献を意識しながら，著者らと鳩山町の関係者で討議を重ね，継続的な地域貢献を目標とした共同研究を始めた．

なお，本プロジェクトは，大東文化大学ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：DHR19-008).

Ⅲ.「地域のお茶の間」を目指す,「花畑プロジェクト」の展開

1)「花畑プロジェクト」の結成

本学の看護学科設置を契機に，実践に基づいた地域看護教育を目指して,「大学の近隣地域の地区踏査」,「住民のニーズの把握」,「住民組織作り」へ段階的に進めている中で構想が生まれた．そこで，首都圏にある鳩山町における地域の「健康と癒し」を理想とする目的で，住民，地域包括ケアセンター，保健センター，大学研究者が協働で取り組むための研究グループ「花畑プロジェクト」を立ち上げた．

地域看護の視点で,「健康長寿と癒しのお花畑の会」(図 1)を結成し，大学の研究者，行政の担当者と協働して，花畑プロジェクトは「地域のお茶の間」をめざし，住民主体の組織づくり型保健活動をスタートした(図 2).

図 2　研究グループの活動写真

2)「地域のお茶の間」となるお花畑の選定

選定基準として，「気軽に高齢者同士が会える」，「虚弱者でもアクセス可能」，「保健医療スタッフが近くにいて安心である」，などを挙げられた．これらの要素を含めた場所を基準に，地域環境に詳しい保健センター，地域包括ケアセンターのスタッフ，大学研究者と協議し鳩山町地域包括ケアセンターの敷地内を選定した．

研究グループは健康増進を目的とした地域住民間の交流を図るため，園芸活動を中心とした住民組織へのサポート方法を検討した．2019 年 9 月より教員（大学研究者）と学生は地域のイベントで住民に「健康長寿と癒しのお花畑の会」の趣旨を説明し，説明会への参加を促した．約 1 か月後の 2019 年 10 月，初めての教員による説明会が開催された．地域住民 9 名の参加者にガーデニングを通じて，参加者同士の交流や花と緑にあふれる街づくりを目指すと説明した後，住民との意見交換の時間を設けた．9 名の参加者は辞退者が 3 名で，6 名の方は園芸活動に興味をもち，率先的に友人や近所の住民に声掛けして，次の説明会に参加すると組織力を強化するように働きかけた．近隣住民同士による自主的な声掛けという行動は，我々研究グループが，「健康長寿と癒しのお花畑の会」(図 1)の活動を目指すところと一致した．

図 3 住民組織「健康長寿と癒しのお花畑の会」の活動

12 月第 2 回説明会では，第 1 回説明会の参加者の働きかけによって「健康と長寿のお花畑の会」のメンバーは 20 名に達した．住民たちは園芸活動・園芸作業の進め方や小グループの構成，園芸活動時期と時間帯も討議するようになった．この際，教員および行政関係者は住民による自主的な組織の運営や，住民同士の会話，情報交換を尊重した．

Ⅳ．花畑プロジェクトを推進する住民組織の特徴と大学の果たす役割

上で見たように，高齢者が楽しみつつ園芸活動・園芸作業を行うことで互助の機能を促進し，身体機能を強化する「花畑プロジェクト」は，秩序を保ちつつ継続的に行われることで，より大きな効果が期待できる．そのためには，高齢者個人の自主性・積極性や，地縁を基盤にした人間関係に期待するだけでなく，花畑プロジェクト活動を組織化していく必要がある．

組織化は，大きく分けて官僚制もしくは合議制によって行われる[1)]．官僚制による組織化は，責任が明確で大規模な組織の形成に適しており，組織を長期間にわたって維持するのに向いているとされる．しかし，命令や手順などが重視されるため，権力が特定の人間に集中するという課題がある．これに対して，合議制による組織化は，責任が分散して無責任に陥りやすく，メンバーが

容易に離脱できるため大規模な組織の形成は困難で，組織の長期の維持には向かないという短所がある．しかし，話し合いが重視され組織への個人の意思が比較的尊重される利点がある[2)]．

このため，高齢者の自主的な参加と互助を促進するには，官僚制よりも合議制による組織化の方が適していると考えられる．同時に，上で見た合議制による組織化の特徴を踏まえると，健康長寿をめざす花畑プロジェクトの住民組織を長期間にわたり維持していくためには，研究グループ，地域保健・地域包括ケア関係者，行政機関といった様々な組織が連携・支援していく必要がある．

大学は地域の中で地域の健康課題に実践的に関わり，課題解決に向けて行政と一緒に取り組んでいる．大学の立場から地域住民の活動に対して貢献することが可能であることから，この活動を企画し全体を統括できる立場にあるからである．加えて，図4にあるような四者間の連携を調整するのも，大学の果たすべき重要な役割である．これらのことを踏まえると，大学は花畑プロジェクトの住民組織を支える中心的な機能を果たせると考えられる．

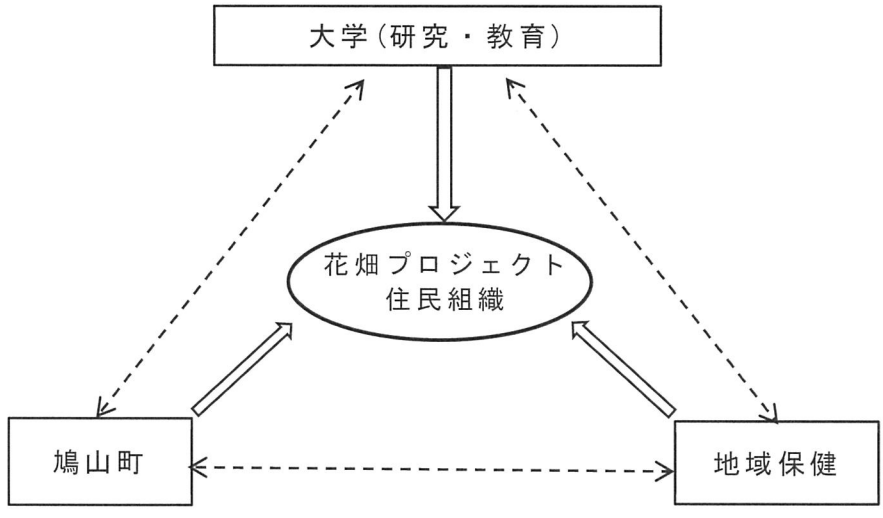

図4　花畑プロジェクト住民組織と各機関の連携・調整の概念図

V．まとめ

本論では，これまでの「花畑プロジェクト」のこれまでの展開の推移と，プロジェクトに参加する地域住民の組織化について述べた．本プロジェクトの地

域組織づくりには，大学単独での遂行は困難であり，地域住民との連携はもちろん，様々な組織との調整・連携が不可欠である．同時に，この相互の関係性は，大学は「資源」として地域へ貢献し，逆に地域は「資源」として大学の看護教育に貢献できる潜在力を有することが地域連携の中で最も重要である．

地域包括ケアシステムを推進している中，住民組織づくりは「花畑プロジェクト」を通じて住民同士の助け合いのきっかけになる．我々研究グループは，住民組織の力を強化することで地域包括ケアシステムの「互助」機能の促進につなげられると考えている．

写真掲載については関係者の許可を得ている．

引用・参考文献

1)磯山優（2009)『現代組織の構造と戦略』，創成社．P12-13

2)沢田善太郎（1997)『組織の社会学－官僚制・アソシエーション・合議制－』，ミネルヴァ書房．p215

3)斎藤民，近藤克則，村田千代栄ら（2015)「高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差」『日本公衆衛生学会誌』第62巻第10号

4)東方和子，澤田みどり，生田純也ら（2011）:通所介護施設における虚弱な高齢者向け園芸活動プログラムの効果.老年学雑誌（1)，p29-38